

國産望遠鏡に関する參考資料

下 關 廣 津 藤 吉

文化4年(1807年)7月魯人に對する國防のため、蝦夷地に其監視役所である遠見番所と云ふものが出来た。其節同所より長崎奉行に對し遠見番の指導者として、役人の派遣と望遠鏡8本入用の事を申來り當時の奉行松平圖書頭が、翌年2月に日高一郎太、別府眞右衛門と云ふ2人の役人を遣はし、同時に5個の望遠鏡を其請に應じて送つた。當時長崎の遠見番所には野母遠見番所に8本、小瀬戸に5本、天草に3本丈けしか備付けてなかつた。8本の要求に對し之が製作には100日餘を要し、1本の代價銀750目程を要するものであるが急場の用を辯ずるため、野母と小瀬戸のもの13本の中から5本を流用することにし、當時長崎町眼鏡師森安丈衛門所持のオランダ渡木筒の大遠見鏡が、格別上等品なること故希望によつては右の品を差出してもよいと返事してゐる。そして松前へ持參の遠目鏡は長持1棹に納め、非常な注意の下に送られたものである。面白いのは其節長崎小川町御目鏡師安海屋文左衛門に大遠目鏡を注文した其精細なる見積書がある。時は今から127年前のことである。

覺

一、大遠目鏡惣銅筒長さ四尺八寸余、手許の差渡一寸七分手先の差渡二寸、地金の厚み一分何れも曲尺、但見當の處黒角にて筒先きの押金眞鍮。

右仕立代銀積り左の通りに御座候

一、銀百十匁

上筒惣銅長さ八寸余、厚み凡一步程、差渡筒前一寸五歩、筒先き二寸に拵立手間料共

一、同七十五匁

内、眞鍮にて三繼入子、但一番、二番、三番の石持を上筒に準じ長短は石の組合せに相準ず拵立手間代共

一、同十匁

先き石四番目の押へ金眞鍮にて拵へ但見通の所玉縁ち附手間料共

一、同四十匁

筒の上胴金入但眞鍮にて五ヶ所大小拵手間代共

一、同二十匁

跡先の蓋二つ惣銅但眞鍮にて玉縁ち相用ひ手間代共

一、同十匁

筒の上に木にて堅筋六本其上黒漆にて惣塗り手間料共

一、同十匁

御目鏡箱但開き蓋にて金具相用ひ手間料共

メ銀三百四十匁

一、銀四百十匁

御目鏡石代同仕上手間料共、是は仕上迄には疵も相見え或は破れ損じ等も
出来仕り候依つて石を數多仕立組合候につき石代并手間料の儀は誠に相極
め難く候へ共此銀高の積りに御座候

合計銀七百五十匁

右者御遠目鏡壹挺分仕立候代銀積り高書面の通りに候 以上

辰(文化五年)二月

氏

名

とある。長崎に於ける眼鏡造りの歴史は長崎夜話に長崎住人濱田彌兵衛と云ふもの壯年の頃、蠻國へ渡り眼鏡造り様を習ひ傳へ來りて、生島藤七と云ふ者に教へて造らしめたるより今に傳はり來つてをる云々、今から300餘年前のことであるから長崎の眼鏡の歴史は相當古いもので、延寶2年(1674年即ち今より262年前)には目鏡師2人3貫目3人扶持を貰つてゐた記録があるから、日本では一番古い歴史を持つものと云つてよいであらう。

(以上の記事は私が先日長崎にて100年前に調製した、古屏風の中の貼紙中より發見せし當時の奉行所の古記録により記述したもので、他に得難い資料と信じてゐる。)

「天界」12月號の豫告

- 基礎知識：スペクトルの話：.....わかり易い連續講座の開設
○望遠鏡を購入せらるゝ方へ.....新たに望遠鏡を購求・施設さるゝ方々への好指針
○土星環の再消失!!.....又しも、土星環が消失する。この好機逸すべからず
○阿里山での黃道光觀測記.....南國の高山で觀測した本田氏の快記録
○天象、觀測後記・豫報、星座案内、16卷總目次等々.....乞御期待.....

